

2020年度基盤教育機構FD「ワイガヤ研修」実施報告

清水 栄子 ・ ソーントン, キャサリン

Report of FY2020/2021 faculty development “Waigaya” FD program in the
Institute of Liberal Arts

Eiko SHIMIZU, Katherine THORNTON

2020年度基盤教育機構FD「ワイガヤ研修」実施報告

清水 栄子 ・ ソートン, キャサリン

Report of FY2020/2021 faculty development “Waigaya” FD program in the
Institute of Liberal Arts

Eiko SHIMIZU, Katherine THORNTON

【キーワード】 ファカルティ・ディベロップメント、「知の探究」科目、アンケート

1. はじめに

基盤教育機構では、「ワイガヤ研修」と称するファカルティ・ディベロップメント（FD）を機構会議終了後に実施している¹。秋学期のワイガヤ研修は「知の探究」科目をテーマとして複数回、継続的に実施した。

今回のテーマである「知の探究」科目について述べておく。基盤教育科目の新カリキュラムが2021年度から導入される。「知の探究」は、今回のカリキュラム改訂により導入される新規科目である。カリキュラム改訂に携わられた武田裕紀副機構長は、同科目について以下のように説明されている。

知の探究は、ひとつの課題探求型のテーマのもと、3名のディシプリンの異なる教員が、それぞれの学問からアプローチして、課題解決の道筋を受講生に体感させる科目である。講義形式のみならず、グループワークや資料調査、プレゼンテーションなどの教授法を積極的に取り入れる。最終的にはアカデミックライティングの作法を習得し、その成果を2000字程度のペーパーとして示すことを到達目標としている。

基盤教育機構内のカリキュラム体系においては、1年生の秋学期に設置される。1年生春学期の「日本語表現」の成果をアカデミックな内容で実践すること、また3つのディシプリンに触れることで、主体的な問題意識をもったうえでリベラルアーツ・サイエンス科目の履修を選択できるようになること、このふたつの役割が当科目に期待されている。（本稿のために作成された文章による）

本稿は、「知の探究」科目に関わるワイガヤ研修の実践報告である。まず、本研修の目標や方法

¹ これまでのワイガヤ研修の実施報告は、『基盤教育論集』第6号（2019）、第7号（2020）に掲載。

などの実施概要、次に研修参加教員に対するアンケート結果、最後に研修の成果と今後のFDに対する要望についてまとめる。

2. ワイガヤ研修の実施概要

2020年度秋学期のワイガヤ研修は、担当の有無にかかわらず、基盤教育機構のすべての先生方に「知の探究」科目について理解を深めてもらうFDはできないかという梅村修機構長からの依頼からスタートした。1つの探究課題に関わる複数教員による授業運営は初めてのことであり、FDとして取り組むにも良いテーマと考えられた。夏休み期間中に、梅村機構長、伊藤文男副機構長、武田副機構長とFD担当者との事前ミーティングにより、同科目に関わる情報および意見交換を行い、以下のようなワイガヤ研修として、取り組むこととなった。

(1) 目標と方法

以下の2つの目標を設定し、複数回、継続的に実施することとした。

- 2021年度からスタートする「知の探究」科目について理解する
- 複数教員によって教育に関わる意見交換の機会とする

実際の授業と同様に3名の教員で「知の探究」の授業設計をしていただくこととした。この授業は、課題探究のテーマを設定し、構成される科目である。参加者には研修初回までに、6つの課題（表1）を提示し、自身の専門分野から興味・関心のあるテーマを選択していただいた。その結果を基に4チームを編成した。選択された課題は、「1. なぜ私はこのようにふるまうのか」、「3. みんなでハッピーになるのは可能なのか」、（各1チーム）、「6. 笑いとは何か」（2チーム）である。

表1 6つの課題

- | |
|---|
| 1. なぜ私はこのようにふるまうのか — 思考と行動の謎 — |
| 2. 世界はどのように拡張・分裂をしてきたのか — 世界の現在・過去・未来 — |
| 3. みんなでハッピーになるのは可能なのか — 持続的発展の可能性 — |
| 4. 美と快はどこから来るのか — 文芸と芸術の秘密 — |
| 5. 政治は信じられないのか — 政治制度と個人 — |
| 6. 笑いとは何か — 「面白さ」を分析する — |

※参加者に選択された課題にマークしている。

本来であれば、チームメンバーで相談の上探究する課題テーマを決定し、授業設計を行っていただく方がよいと考える。しかし、課題の設定までに時間がかかることも想定されたため、まずは興味・関心のある課題でチームを編成し、その後必要に応じて探究テーマを検討いただくこととした。

(2) 各回の実施内容

「知の探究」に関わる研修は全5回、機構会議同様にテレビ会議システムを利用して実施された。COVID-19感染防止のためである。参加者は、実際に授業設計を行うチームメンバー12名²と次年度の授業担当者5名の計17名である。各回の研修内容は表2にまとめている。

表2 ワイガヤ研修の実施記録

回	開催日	内 容
1	9月17日	FDの趣旨説明（梅村機構長）「知の探究」科目の概要（武田副機構長） 探究課題とチームメンバー発表、ディスカッション 【課題1】授業科目名と授業概要（300字程度）（メ切10/19）
2	10月1日	チームによる打ち合わせ
3	10月22日	授業科目名と授業概要報告に関するチーム報告と質疑応答 【課題2】授業計画、授業の手法、評価方法等（メ切12/15）
4	11月12日	次年度授業担当者による授業計画に関わる発表と質疑応答
5	12月17日	各チームによる授業計画報告および質疑応答

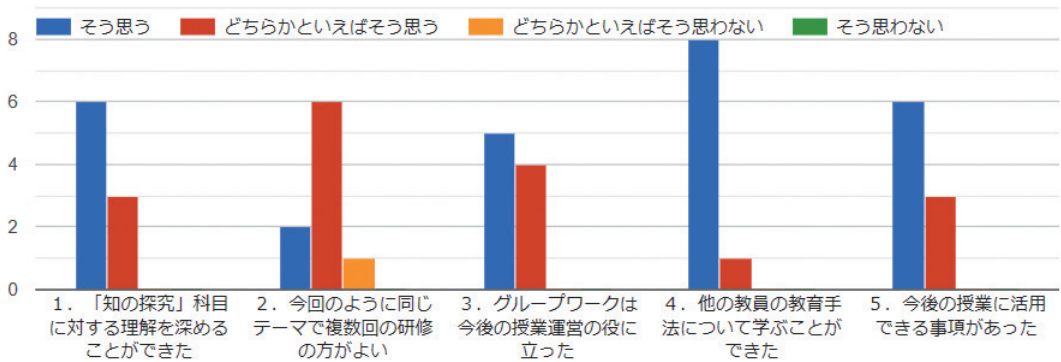
授業設計を段階的に行ってもらうために、チームで取り組んでもらう2つの課題とともに、次年度の担当者による授業計画の共有を取り入れた。また、チーム内での協議時間を確保できるように、課題は早めに予告した。課題1は、取り組む探究課題を決定し、授業科目名を決めること、そしてチームメンバーの専門分野からのアプローチが分かる概要の作成である。各チームによって作成された授業科目名と概要は、【資料】に掲載している。課題2は、授業日程・計画、授業手法や各回の授業評価などの計画である。これらの課題の進捗状況は、相互に確認できるように、Google フォームを活用した。課題に対する各チームの発表、次年度授業担当者による授業計画の報告、その後の質疑応答は、回を追うごとに積極的に行われるようになったという印象を受けている。

3. 参加者アンケートの結果

「知の探究」科目に関わるFDや今後のFDに対する参加教員の意見を集約するために、アンケートを実施した（回答者数9名／17名、53%）。アンケートは、4つの選択肢からなる5つの設問（回答結果は図1のとおり）と2つの自由記述で構成した。

グラフ1に示すように今回の研修目標のうち、「知の探究」科目への理解について、回答者から肯定的な結果が得られている。また、2つ目の目標である複数教員による教育に関わる意見交換の機会については、設問3～5の結果および後述する自由記述から、ある程度達成できたと考えている。

² チームメンバーとして参加されたが、授業の関係でワイガヤ研修には参加できなかった教員も含まれる。



グラフ 1 「知の探究」科目に関わるFDについて

自由記述では、「この研修を受講して良かったと思われる点」について尋ねた。「他の先生方の授業の手法なども学ぶことができ、大変勉強になりました。」のように、他の教員の教育手法について学ぶことができたという回答が最も多かった。さらに、「それぞれの背景（ディシプリン）からの多様なアプローチの方法が、自身の授業のあり方を見直す契機になりました。」という回答も見られる。

「知の探究」科目に対する理解として、「授業案の作成を行うことで、具体的な授業のイメージを構築することができました。」「知の探究」は、基盤教育の進化や深化を実現できる高い可能性を持っていることを認識できました。」という回答が見られた。

このほかに、「グループによる意見交換の機会ができたこと」「他の教員の専門やそのアプローチを知り、知的刺激を受けた」という回答が寄せられている。

4. まとめ

今回の研修運営には、3つの特徴があったと考えている。1つ目は、同一テーマで継続的に行った点である。実際に架空科目の授業設計を行うこと、その過程で次年度から授業を担当する教員の授業計画を共有することで、この科目の理解を深めることを目指すよう計画したためである。2つ目は、オンラインで実施した点である。そのため実際の授業と同様に、各チームからの発表や質疑応答の運営についての工夫が必要となった。参加教員には、授業を受講している学生側の視点に立つこともできたのではないかと考えている。3つ目は、グループワークを中心とした点である。事前課題を設定し、ワイガヤ研修の時間外でチームメンバーによる協議を行っていただいた。この協議によって、他の教員の教育や授業手法に対する理解と自身の教育・授業へのヒントが得られたことがアンケート結果からも窺える。

上述のアンケートでは、今後取り上げてほしいFDのテーマについても自由記述で尋ねている。回答者の半数がオンライン授業に関するものであった。具体的には、「オンライン授業の手法」、「オンラインによるグループワークの方法」、「オンデマンド授業による学生同士の意見交換の方法」、

「オンデマンド授業による公平かつ厳格な評価」という回答であった。このほかに「日本の大学や本学の今後」、「追大生の特徴」、「基盤教育機構の目指す近未来」、「ピアレビューによるアクションリサーチ」という回答があった。今後のFD計画に際して、アンケートに寄せられたニーズを考慮していきたい。

謝 辞

オンラインと対面の両形態による実施となっていた秋学期の授業運営のお忙しい中で、継続的FDによる授業設計に取り組んでいただいた先生方には、心からお礼を申し上げたい。

【資料】授業テーマおよび授業概要

メンバー	テーマ	科目名	授業概要(300字程度)
伊藤 文男 田上 正範 松岡 真由子	1. なぜ私はこのようにふるまうのかー思考と行動の謎ー	社会の心理	人が「ふるまう」とときには意思決定が伴う。キャリアからみた人生の選択、信頼関係づくりのためのコミュニケーションの選択、言語やパーソナリティの違いから異なる文化や価値観を受け入れる選択など、意思を決める場面がある。本授業では、キャリア、コミュニケーション、認知心理の観点からオムニバス形式で理論を学び、ワークを通じて、自らの生き方や社会との関わり方について考える機会を設けます。最終課題は、社会の一員としてどう「ふるまう」のか、自分の信念や大事にしたい考え方について自分の言葉で語る公開発表です。個人ワーク、グループワークを組み合わせ、個人課題、ディスカッション、プレゼンテーションを通じて理解を深めます。
大串 恵太 Katherine Thornton 中村 都	3. みんなでハッピーになるのは可能なのかー持続的発展の可能性ー	人の幸福と持続可能な発展	幸せとは何でしょうか？世界には様々な価値観がありますが、すべての人が「幸せ」になることは可能なのでしょうか？世界全体を見渡すと、人の生存や幸福に欠かせない食べ物（食料）はどのように確保してゆけばいいのでしょうか？そして、テクノロジーの発展は人類を幸福にできるのでしょうか？本授業では人の幸福と持続可能な発展について、広い視野で捉え、考えていきます。グループワークを豊富に取り入れ、ディスカッションやプレゼンテーションを通じて、自分自身の考えを深めます。最終的には、自分自身と社会の幸せについて価値観を説明できるようになり、「持続可能な発展」の実現を念頭に、どのような行動をとっていかをまとめます。
千葉 英史 東田 充司 清水 栄子	6. 笑いとは何かー「面白さ」を分析するー	なぜヒトは笑顔になれるのかー感情表出の可能性ー	人はどういうときに笑うのでしょうか。楽しい時、うれしい時、目標を達成した時など様々な場面が考えられます。実は悲しい時にも笑うこともあるかもしれません。この授業では、スポーツ学、教育学、演劇学の観点から「笑いとは何か」を考えていきます。具体的には、クラブ活動、大学の学習、パフォーマンスなどの様々な場面について、笑いとその背景にある成果について学びます。映像教材、文献購読などの個人学習に加えて、グループワークや話し合った結果の全体共有によって、さらに理解を深めていきます。最終的には、授業で学んだことや考えたことを学生生活や学修場面に応用できる力を養うことを目指します。
梅村 修 稲富 百合子 大谷 歩	6. 笑いとは何かー「面白さ」を分析するー	〈古今東西の「笑い」を考察する〉	古代の神話から現代のデジタルデバイスによる文書、また日本から欧米の文学や文化における古今東西のテキストの中の「笑い」を各担当者の専門的観点から紹介し、各々の比較検討を通じて「笑い」の普遍性を探っていく。